

通巻 49 号 December, 2017

日本通信教育学会報

Japan Association of Distance Education

目 次

・第 65 回研究協議会を終えて……………	1	・会員の声……………	4
・平成 29 (2017) 年度『研究論集』投稿募集……………	2	・通信教育の動向……………	5
・平成 29 (2017) 年度第 2 回理事会報告……………	3	・通信教育のこの 1 冊⑫……………	6
・会員……………	3		

第 65 回研究協議会を終えて

日本通信教育学会第 65 回研究協議会が、2017 年 10 月 28 日（土）桜美林大学四谷キャンパス（千駄ヶ谷）で開催されました。本年は、通信教育制度創設 70 周年という節目の年でもありましたので、記念行事も併催し、例年にも増した活発な発表、議論となりました。参加者は 51 名（会員 36 名、非会員 15 名）でした。

初めに、白石克己会長から通信教育の 70 周年を振り返った、そして未来へ向けたメッセージを中心とした挨拶により開会されました。その後、6 件の自由研究発表が続き、通信教育制度創設 70 周年行事が行われました。途中、昼食・休憩時に総会が開かれ出席会員によって全ての議案が承認されました。そして、夕刻からの情報交換会には 27 名の参加があり充実した一日となりました。

■第 65 回研究協議会【自由研究発表】■

(1) ペンタム ピヤワン会員は、「タイ公開大学における中途退学の防止に関する考察—スコータイタマティラート公開大学 (STOU) の事例—」と題して、タイの公開大学における中途退学の状況と防止策に関する取り組みについて発表されました。(2) 石川伸明会員は、「『通信による教育』の教育方法に関する法規—通信教育における『維持生』『遠隔生』をめぐる問題—」と題して、社会教育法解釈の観点から通信教育の定義について発表されました。(3) 秋山吉則会員は、「広域通信制高校における学習センターの教育環境」と題して、学習センターが立地する場所が高校教育を行うための教育環境として適格性の観点からどのような意味合いを持っているのかについて発表されました。(4) 長谷川晴通会員は、「国鉄の通信教育」と題して、1951 年に開催された第 1 回研究協議会での国鉄本庁職員局養成課による研究発表以来、本学会と国鉄職員の通信教育に長い歴史があることなどについて発表されました。(5) 土岐玲奈会員は、「通信制高校における教育と福祉の連携に関する課題」と題して、福祉的ニーズを持つ生徒を支える独自の支援体制を有する公立通信制高校の実態について発表されました。(6) 田島貴裕会員は、「通信制高校の教育需要に関する分析—経済学的側面から—」と題して、教育経済学の観点から構造改革特区の影響や財・サービス市場としての通信制高校の在り方、学校数や生徒数の増加要因について発表されました。

■通信教育制度創設 70 周年記念 通信教育は『教育』を開放できたのか—通信教育の 70 年—■

【基調講演】

鈴木克夫会員より、「通信教育はどんな制度として始まったのか」と題する基調講演がありました。7 点に及ぶ貴重な資料を提示しながら 70 年前の文部省通信教育構想から始まった通信教育諸規定の制定や高校、大学、社会通信教育がどのような制度として始まったのかについて講演されました。

【シンポジウム】

シンポジストとして高橋陽一会員より「社会人の学び直しとメディア」、手島純会員より「通信制高校はアヴァンギャルドだ」、白石克己会長より「学校式通信教育への挑戦—テキストとメール」と題する発表があり、コメン

テーターである重田勝介会員からシンポジストの発表へのコメントと併せてパネルディスカッションのテーマが提示され活発な議論が展開されました。石原朗子会員と古塚典洋会員によって滞りなくシンポジウムが進行したことを併せて報告いたします。

以上、研究協議会と通信教育制度創設 70 周年行事に充実したプログラムが生まれ、多くの会員、参加者による熱心な発表や討議が行われ、盛会のうちに終了することができました。

最後に研究協議会の準備と当日の会場運営にご協力いただいた会員の皆さまに感謝申し上げます。

(デジタル・ナレッジ 小林建太郎)

平成 29 (2017) 年度『研究論集』投稿募集

下記の通り、平成 29 (2017) 年度『研究論集』への投稿を募集します。奮ってご応募ください。

(1) 論文

①題目届の提出

- ・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに題目等（①氏名、②所属、③題目）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。
- ・提出締切：平成 29 (2017) 年 12 月 20 日（水）

②原稿の提出

- ・提出方法：期日までに原稿（MS-WORD）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にて提出して下さい。
- ・提出締切：平成 30 (2018) 年 2 月 28 日（水）

③刊行日（予定）

- ・平成 30 (2018) 年 6 月 30 日（土）

④投稿規定・査読基準

- ・『平成 28 年度 研究論集』巻末、『日本通信教育学会報』通巻 48 号 2 頁、または日本通信教育学会 Web サイト（<http://jade.r-cms.biz/>）をご参照ください。

(2) 書評・図書紹介

①「書評・図書紹介」で取り上げる図書

- ・通信教育、遠隔教育などに関する内容を含み、かつ原則として刊行から 3 年以内（2015 年 1 月以降）のもの。

②分量

- ・「書評」が 4,000～6,000 字程度、「図書紹介」が 2,000～4,000 字程度

③投稿希望の提出

- ・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに、①氏名、②所属、③取り上げる図書の著者名・書名・出版社名・刊行年を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。
- ・提出締切：平成 29 (2017) 年 12 月 20 日（水）

④原稿の提出

- ・提出方法：原稿は MS-Word で作成し、電子メールに添付して事務局宛（jade.office.obirin@gmail.com）にお送りください。
- ・提出締切：平成 30 (2018) 年 2 月 28 日（水）

⑤その他

- ・「論文」と「書評・図書紹介」との同時投稿を認めます。
- ・必要に応じて査読委員会で採否を審査し、修正を求める場合があります。

平成 29 (2017) 年度第 2 回理事会報告

平成 29 (2017) 年度第 2 回日本通信教育学会理事会が、平成 29 (2017) 年 9 月 5 日 (火) 15 時から 17 時に桜美林大学四谷キャンパス (千駄ヶ谷) で開催され、以下の事項が審議、報告された。

【審議事項】

(1) 第 65 回研究協議会および通信教育制度創設 70 周年記念行事のプログラム (案) について

資料 1 に基づき、第 65 回研究協議会および通信教育制度創設 70 周年記念行事のプログラム (案) について説明があり、検討の結果、①一般参加費を無料とすること、②自由研究発表を各 5 分短縮すること、③昼食・休憩を 10 分延長し、シンポジウム関係者による打合わせ時間を確保すること、④シンポジウムを 20 分延長し、休憩に充てること、が了承された。

(2) 研究報奨制度の創設について

資料 2 に基づき、研究報奨制度の創設について説明があり、検討の結果、研究報奨制度の創設も含め、繰越金の用途を幅広く検討すること、そのためワーキンググループを立ち上げることが了承された。

(3) 平成 29 (2017) 年度事業計画・予算 (案) について

資料 3 に基づき、平成 29 (2017) 年度事業計画・予算 (案) について説明があり、検討の結果、事務局幹事への日当・交通費の支出のために事務局費を増額すること、金額等の詳細については会長と事務局に一任することが了承された。

【報告事項】

(1) 平成 28 (2016) 年度決算報告監事監査の結果について

資料 4 に基づき、石原監事より平成 28 (2016) 年度決算報告監事監査の結果について報告があり、原案の通り承認された。

会 員

Web サイトでは省略します

会員の声

通信制高校の研究スタイル

自分の専攻は「学校地理学」だと思っています。都心に開設された学習センターは「オフィス立地」の新しい形態です。通信制高校の本校が過疎地域の統廃合された学校の跡地に開設されることは、「地域おこし」につながり、学校の持つ地域での「拠点性」が維持されます。各地に「立地」する通信制高校の「本校・分校」がどのような条件・理由から開設されたのか、生徒にどんな学びを保障するのか、その地域の教育に与えている影響、課題や問題点の指摘を目的としています。そのため、各県の「通信制高校の設置基準」と各校の「学則」を集め、文献・地図検索のうえ現地に行きこれらの施設の状況を確認し、場合によれば訪問・聴き取りを行っています。研究を始めたころ(2010年前後)には友好的に迎え入れてもらえましたが、最近では事前にアポを取ることが難しい場合が多く「飛び込み」で訪問しています。相手にとっては迷惑な訪問かもしれませんが、入り口で断られればそれまで、中に入れてもらえればしめたものだと思います。今まで何回か訪問して実情を聞き取りました。

こんな研究手法は通信制高校の研究者としては少々異質な存在だと思っています。多くの研究者は通信教育に従事している(していた)事を踏まえての研究か、様々なつながりから通信教育を行っている現場に「参与観察者」として入っている場合が多いと思います(特に学生・院生の場合)。それぞれ独自の視点から実際に行われている教育活動について観察されて問題点を指摘されています。教育学研究には教育現場についての観察が必要です、そういうことがあるからこそ現代の教育の実情が明らかにされ、課題や問題点が浮かび上がってきます。研究発表を聞いたたびに、このことを感じています。教育現場を踏まえての皆さんの研究報告に期待しています。

佛教大学大学院修士課程 秋山 吉則

若者支援としての「通信教育」

大学教員生活3年目の私ですが、それまでは大学職員として、主に入試広報・学生募集に17年程、携わってきました。その業務の中で、大学全入時代といわれながらも、なぜ高校生は大学に進学しないのだろうか、という疑問が生じ、社会人学生として通信制大学院へ入学し、その後、博士後期課程へ進み、学位論文としてまとめることとなりました。学位論文では若者の就労問題を分析視角のひとつに取り上げましたが、執筆の過程において、高校、大学にかかわらず、一旦は学校から社会への移行を果たしたものの、離職した者のその後の動向について関心を持つようになりました。離職した若者たちはどこへ行ったのだろうか、離職した者への社会的ケアはどのようになっているのだろうか、これが私の研究関心のひとつであります。

つまり、離職した若者を社会へ戻す仕組みづくりです。こうした問題は、自己責任論の中で、個人の問題に帰してしまいがちですが、やはり、若者支援としての教育インフラの整備を進め、「スキルアップ」「学び直し」の場を提供していくことが必要だと感じています。そのひとつの方法として、通信教育、遠隔教育に可能性を見出したい、これが私の入会の動機でございます。もちろん、既に民間企業を中心に、一定の環境はありますし、人によっては「今さらどうなんだろう・・・」という疑問を抱かれることもあるでしょう。しかし、私は、大学教育を軸とした地道な仕組みづくりこそが重要だと考えています。紙幅の都合で詳細は次の機会とさせていただきますが、とくに地方において、その重要性は増していると感じています。

このような問題意識を持ちながら、研究活動に邁進していく所存です。まだまだ研究者として未熟ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

神戸松蔭女子学院大学 長谷川 誠

◆「会員の声」を募集◆

「会員の声」を本誌に掲載します。掲載を希望する会員は、原稿(600~750字程度、MS-Wordで作成)を事務局(jade.office.obirin@gmail.com)までお送りください。

通信教育の動向

**全国高等学校通信制教育研究会**

全通研の秋・冬の報告と予定は次の通りです。

・NHK 高校通信教育委員会

12月1日(金)午後、NHK放送センターにおいて、NHK高校講座主催による標記委員会が開催されました。NHKから平成30年度の放送計画の説明があり、その後、全通研側から要望・意見などを伝えて番組向上に役立てていただきます。

・平成29年度第2回理事会

12月1日(金)午後、NHK放送センターにおいて第2回理事会を開催しました。理事会に先立ち、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室長常盤木祐一氏より、7月に発表された「高等学校通信制教育の質の確保・向上方策について(審議のまとめ)」についての説明と全通研の協力に対し謝辞があり、引き続きの協力要請がありました。

29年度前半の活動報告・会計報告等とともに、「全通研大会のあり方」「32年度全通研北海道大会日程等」「全通研新規加盟」について審議しました。

・全通研研修会

12月15日(金)、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、早稲田大学人間科学学術院准教授森田裕介先生を講師に、「NHK高校講座番組の効果的な活用に向けた実践事例研修」と題して研修会を開催します。
(事務局長 村越 和弘)

**公益財団法人 私立大学通信教育協会**

本協会は、通信教育課程を設置する私立大学相互の協力によって、大学通信教育の振興を図ることを目的に設立されており、現在、その趣旨に賛同した35大学・17大学院・9短期大学の合計61校が加盟校となって運営し、大学通信教育の周知普及と水準向上の事業を推進しています。

(1) 大学通信教育の周知普及事業

大学通信教育の在り方を広く社会に伝え、入学希望者に情報を提供するために、本協会主催の事業として「平成29年秋期合同入学説明会」(8~9月、全国5会場)を実施し、さらに12月16日には通信制大学院の合同入学説明会、来年1~2月には「平成30年春期合同入学説明会」(全国8都市、11日程)を実施します。

(2) 大学通信教育の水準向上事業など

文部科学省の担当者を講師に招き、7月に平成31年度からの新課程実施に向けて「教職課程の再課程認定について」をテーマに情報意見交換会を開催し、加盟47大学・大学院・短期大学から80名の参加がありました。10月には仙台ガーデンパレスにて「大学通信教育職員研修会」を1泊2日で実施して職員の能力向上に努め、東北福祉大学の講師から「通信教育部の被災時対応について」の講演を行いました。67名の参加がありました。また、来年1月には「大学通信教育メディア授業研究会」を開催し、実施大学の事例発表などを予定しています。
(理事長 高橋 陽一)

**公益社団法人 日本通信教育振興協会**

◎文部科学大臣賞を受賞!

11月25日(土)、東京都千代田区の主婦会館・プラザエフにて、当協会主催の第29回生涯学習奨励賞表彰式を開催しました。この表彰は、当協会認定の「生涯学習奨励講座」を特に優秀な成績で修了した者を対象に表彰するものです。今年度は文部科学大臣賞12名、公益社団法人日本通信教育振興協会会長賞28名、総勢40名の方々が栄えある賞を受賞しました。また、授与式の後、当協会理事：白石克己(日本通信教育学会会長)より、当協会が実施する学習指導員制度についての講演が行われ、半学半教の大切さを発表していただきました。式後開かれた祝賀会&学習指導員交流会では、受賞者の喜びの声、学習指導員の活動報告など多くの方々の発表などがあり、盛会裏に終了しました。

◎全国の各地域で学習指導員が活動中です!

通信教育で学び、身に付けた知識や技能、また実社会で培った専門的な知識や技能を生かし、地域での生涯学習の支援者として活動する学習指導員の認定登録数は、延べ2,075名となりました(2017年11月30日現在)。指導分野も42を超え、教室を開講したり、公民館や生涯学習センターでの講師、小中学校での課外授業の支援など全国各地で活動中です。活動の一部は当協会ホームページ(<http://www.jais.or.jp/wewe/index.html>)で紹介しています。ぜひご覧ください。
(事務局長 友縄 秀男)



通信教育のこの1冊⑫

浜島律子著 『はい、こちら通信制高校です』 (2003年 新風舎)

本書は、公立通信制高校で国語科の教員として勤務した著者が2001年から2002年の出来事を切り取って、エスノグラフィー風にまとめたものである。入学式から始まり、各学期を追いながら日々の通信制高校の様子が活写されている。今まで中学や全日制高校で勤務した経験はあるが、通信制高校がはじめての著者の通信制高校での「てんやわんや」が描かれている。かなりカルチャーショックを受けたのだらうと、文面からは想像される。

『リーン、リーン』。また電話。『あなたの職場はいつかけても話中だ』と友だちに言われるが、そう言われても仕方がないほどよく電話がかかる」という冒頭の文は、いかに電話という手段が通信制高校のなかで頻繁に使用されていたかが分かる。本の題名も「はい、こちら通信制高校です」であるし、表紙も電話の絵である。著者はひっきりなしにかかってくる電話に辟易しているが、しかし、電話のなかでの教育課題には敏感である。全日制高校から送り込まれる転編入生の対応、電話で「死にたい」と言ってくる生徒のことなど、電話は生命線である。

通信制高校のおもしろさは、多様な生徒がいることで、誰が先生か生徒か分からない場面もある。健康診断の日、ジャンパーを羽織った60歳ぐらいの男性が掲示板を見ている。遅れてきた生徒が会場を見ているのかと声をかけ、健康診断の用紙を受け取ったかと聞いたら、その男性、むっとした様子で「私は医者です」。この場面ではさすがに笑ってしまった。また、赤ん坊がいるからスクーリングに来る日を変更したいという生徒の年齢が書いてある書類を見たら、「17才」。著者は言葉に詰まる。そして、自分の時間がほしいから、「消去法ではなく、積極的に通信制高校にやって来る人は次第に増えていると思われる」とあったが、今の時点で考えると、この予想はかなり当たっている。現在、多様な生徒像はさらに多様性を増している。

「あーもう飽きた、やってもやっても減らない。もうやめた、レポートなんかもう見たくない!」というほどにレポート添削に追われながらも、著者は生徒の学習環境に気をとめる。著者の学校では通信制生徒が図書館を使えなかったらしい。その理由を事務長に尋ねたら、通信の生徒は図書費を払ってないからだと答えた。著者は怒り心頭で「学校全体を考えてこそ『事務長』だらう。全日制の生徒だけよけりゃいいのか!! 私は怒りで体が震えた」そうだ。学校図書は公費が基本だが、足りない分は私費で賄う。その私費の分の図

書費を事務長は言っているのだが、公費は税金、その税金を払っているのは全日制生徒ではなく、通信制生徒が多い。働いているからだ。だから通信制生徒が図書館を使えないのは、どう見てもおかしく、著者の怒りは当然である。その後、生徒部から図書館使用を求める動きがあったが、音沙汰なし。しかし、突然、使えるようになったという。それは生徒が知り合いの議員を動かし、県議会で質問があったらしいとのことである。そこで著者はまた怒る。「現場からずっと要望しても駄目なことが議員が動くとなぜ即OKになるのか、教員にはなにとわかない」と。確かにそうだ。しかし、著者はただ怒ってばかりいるのではない、通信制高校の生徒を大切にしているからこそ怒っているのだ。それは本文のあちこちに散見される。

いつもクールだが、母親はいなく父親もいつ家に帰ってくるかわからない十代の生徒がいる。中学の頃からそんな家庭環境で、バイトで生活している。そうした生徒への著者の眼差しは暖かい。関節がこわばる病気で車椅子を使っている生徒。病気も進行している。それにもかかわらず、三角関数や『枕草子』を勉強しようとする意欲と努力に敬意を払う著者。通信制高校の教師になくはならない「資質・能力」だ。いや、教員一般の「資質・能力」だらう。通信制高校の扉を叩く生徒たちは、さまざまな事情を抱えている。それをできるだけ受け止めようしてきた教員側の営みもまた通信制高校の歴史なのである。実際に「いつでも、どこでも、だれでも」学べる通信制高校になっていない部分は多いのだが、それを目指そうとすること、そのことが戦後すぐにはじまった通信教育の理念へと通じる。

通信制高校の生徒像は、「勤労青少年と一般成人」からは変化してきたが、通信制高校での生徒の実像こそ各時代における教育問題なのである。まさに、2000年前後の通信制高校のあり様は、中退した生徒をどうするか時代のあり、本書ではそれに多く紙幅が割かれている。

なお、本書は新刊としては手に入らない。古書としての値段の振幅は大きく、1300円の定価が1600円から9000円でネット販売されている(2017年11月)。しかし、通信制高校を研究するなら、この本はぜひ読んでほしい。当時の公立通信制高校の風景が切り絵のように浮かび上がるからだ。

(星槎大学 手島 純)